



寺報 ともしび

金剛山大長寺
令和五年八月十五日発行
第二十一号



潮音寺境内の平和観音像。建立から四十二年、実兄の意志をまもり
継ぐ東堂の康哉師

平和観音建立と 青年和尚の願い

安藤 康哉（大長寺小住）

私の実兄である潮音寺二十五世天英光重大和尚は、昭和二十年四月八日フィリピン・ネグロス島において部下6名を率いて敵情偵察の折、敵弾を頭部に受け壮烈な戦死をとげた。私達家族は当時の家族もそうであったように、半信半疑できつと生還してくるに違いないと言いつけていた。しかしその思いも空しく、かつて上官であった土屋中隊長が来訪され、戦死の状況を知らされるに及んで、戦死が厳然とした事実あることを残念ながら確認せざるを得なかった。

光重和尚は昭和十八年南方戦線に出陣する際、ひそかに遺書を義兄に託し「もし戦死の公報が入った時には、これを家人に渡して下さい。それまでは家人の誰にもお話し下さらぬようお願いいたします」と依頼状が添えてあった。

【次頁へつづく】

青年和尚の遺書

義兄は戦死が確認されるや、かねて保管しておいた遺書を持参し私達家族に明らかにした。若冠二十一歳の青年



光重和尚が皇国日本のため泰然として死地に赴いていった心境を慮る時、はたして胸中なにが去来したのであるうか。この遺書を拝読する度に万感胸に迫り、嗚咽の涙が頬を濡らす。ここに遺書を抜粋して披露し報恩供養の一弁香としたい。

「光重生を享け二十一歳の春を迎えました。その間の御心労を推察いたしますと感無量で涙さえ浮んでまいります。これは祖母様にもそうでした、何一つとしてご安心

させる事とでもなく何時までも親の愛のみにおぼれて成す術とて知らざりし事を恥かしく思っています。光重大命の下、勇躍国軍の先達として南海の島に死所を得ましたことを無上の光栄と喜んでおります。今日までお育て下されしご両親様、兄弟姉妹に厚く御礼申し上げます。光重は昭和

の御代の防人となる覚悟です。絶海の孤島に死す本望です。戦死せしとお聞きになつたらよくやったとおほめ下さいます。それが最高の喜びです。

多くの部下を無くした時はどうか潮音寺に供養塔を建立して下さい。決して決してお嘆き下さいませ。それは光重にとって断腸の思いです。ではご両親様の聖寿万歳を祝いつつ長く良き世をお送りください：」



供養塔を建てる

「多くの部下を無くした時は潮音寺に供養塔を建立して下さい」という兄の意志をなんとしても実現したいと肝に銘じ機会を窺っていたが、その因縁が結ばれず徒に歳月が

過ぎ去るのみであった。

ところが昭和五十二年十月上旬、土屋元中隊長が突然来訪され、戦死した戦友の慰霊供養をしたいので相談したいとの申し出を受けた。まさに晴天の霹靂、この申し出に私は兄の遺志がやっと叶えられる時がきたかと、喜びをかみしめた。「有難うございます。きつと兄もよろこんでいることと思います」と思わず隊長の手を握りしめ感激するのみであった。

こうして同年十一月二十七日、生存者遺族等四十数名が全国各地より集り念願の慰霊塔建立と慰霊祭が盛大裡に催されることになった。この事が翌日の三大新聞に報道されたことは、遠く異国の孤島で望郷の念、切々として母や父の名を妻や子の名を叫びつつ帰らぬ屍となった勇士等に対するせめてもの供養になった

特別志納者の紹介

伍万円也	為年回供養	開成町	永山 茂夫	伍万円也	為大練忌供養	上 島	井上 清隆
壹拾万円也	為大練忌供養	開成町	井上 幸治	伍万円也	為年回供養	榎 本	井上 茂雄
壹拾万円也	為大練忌供養	上 島	石井 寿一	壹万円也	為大練忌供養	南足柄	田口 清次
参万円也	為年回供養	小田原	熊澤 俊雄	拾万円也	為年回供養	中家村	辻村 純夫

のかと思ひ有難く感謝した。

平和観音像が建つ

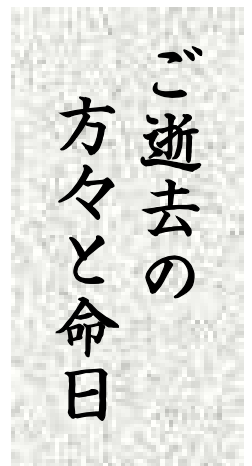
しかし供養塔といつても当時は墓標だけの簡単なものであった。いつか立派な石碑にしなければという要望を受け、私は住職として次のような提言をした。地獄図のような戦場で逝つた勇士の眞の鎮魂のためには、観音様の広大無辺の慈悲の力におすがりする以外にはない。この悲惨な戦争を根絶し、絶対平和を希求する救世の誓願は三十三身に身を分けた慈悲深い観音さまの御力であることを信じ、ここに平和観音像を建立して勇士の成仏得道に資するとともに、世界平和を祈願し、平和観音慰霊祭を建立する以外にはないではないかと訴えた。

幸に全員の賛同をいただき、生存者、遺族をはじめ篤

志の協力者も加わり、平和観音建立の運びとなった。遂に昭和五十六年十一月二十二日、三十七回忌に当たる年に除幕式並びに慰霊祭を盛大かつ感動裡に修行することが出来た。

因みに建立工事の際に遭遇した不思議な現象も畏敬の念をもつて披露したい。

それは観音像を重機で吊り上げ台座に安置しようとした直前、晴天の空が俄かに暗雲となるや小雨が降り注ぎ観音像や台座をしっかりと濡らした。まさに甘露の法雨、勇士の涙雨かと直観した。それは到底言語に絶する感動の極みであった。



・故 瀬戸 陽一様

行年 六十三歳
令和五年四月二十四日没
開成町
施主 奥津 美鶴 様

・故 安藤 瑠璃子様

行年 八十四歳
令和五年四月三十日没
南足柄市
施主 安藤 清次 様

・故 石川 秀雄様

行年 八十九歳
令和五年五月十一日没
中家村
施主 石川 正和 様

・故 井上 清美様

行年 九十六歳
令和五年五月二十九日没
東京
施主 井上 博文 様

・故 平田 ふみ江様

行年 八十二歳
令和五年六月十六日没
上島
施主 平田 伸征 様

・故 鈴木 道男様

行年 八十八歳
令和五年六月二十五日没
松田町
施主 鈴木 ちや子様

・故 石井 宏様

行年 九十一歳
令和五年六月二十七日没
榎本
施主 石井 信江 様

・故 井上 弘様

行年 八十五歳
令和五年七月二十日没
中家村
施主 井上 誠 様

・故 渡邊 堯様

行年 九十三歳
令和五年七月二十二日没
中家村
施主 渡邊 トシ江 様

施食会（四月二十三日）は
四年ぶり、平常開催

副住職 安藤道隆

ここ数年、「施食会」は、コロナ禍で、地区に分散し、開催時間をずらして開催してまいりましたが、本年四月、四年ぶりに、檀家さんが本堂に一堂に集まり、近隣のお寺さんを迎え、開催することができました。

受付を、世話人さまが本堂地下にて護持会費の納入と併せて対応して頂きました。

四年前は、お昼時間にまたがるため、お弁当を用意しておりましたが、今年は、受付を午後一時からに変更し、自



宅にお持ち帰れるよう「菓子詰合せ」を供養のお品として配布いたしました。



施食会にて読まれるお経は「甘露門」と言います。全体は

「奉請（ぶしょう）」
「発願（ほつがん）」
「施食（せじき）」
「見仏（けんぶつ）」
「発心（ほっしん）」
「回向（えこう）」の組み立て
になっています。

そのなかに、「無量威徳自在光明加持飲食陀羅尼」というお経があり、これを唱えながら、ひとつまみの食べ物物を施すと、それが無量の食べ物となつて、無数の餓鬼に施すことになります。

そして、この功徳を積んだ証として、各家の墓前に「お塔婆」を建立することによつて、ご先祖さまへのご供養とするものが法要であります。

施食会は、私たちと縁深いご先祖さまはもちろんのこと、祀り手のない仏様、無縁の仏様、全ての精霊に対し、たくさんのお供えをして供養



の心を差し上げることができ大変、尊い法要なのです。

当日は、天候にも恵まれ、大変多くの檀信徒の方がたが参列されました。

皆様が、亡き人やご先祖さまに対して、お焼香されるご様子は、皆共に、仏さまの慈悲に接しられているように見え、ありがたい気持ちになるのであります。

来年も、今年と同じような形で「施食会」を開催して参る予定であります。

来年の「施食会」を有り難い気持ちで迎えられるよう、この一年も、精進して参ります。

合掌

